1.阿部勝太さん。2.浜人がある十三浜の大指（おおざし）地区。勝太さんの家を含めた十数軒の集落だったが、津波で壊滅的な被害を受けた。現在は加工場が立ち並ぶ。3.壊れたコンクリートブロックとねじ曲がった鉄筋が津波の威力を物語っている。

ふわりと岸を離れた船が左へ舵を切ると、とたん、小島の影に隠れていたまん丸の太陽が目の前に飛び出した。船が砕く白波をものともせず、阿部勝太さん（35）は船のへさきにしゃんと立っている。隣に並ぶ父とはどことなく立ち姿が似ているが、息子の方がいくらか背が高い。

宮城県石巻市十三浜は、無数の湾が織りなす三陸リアス式海岸の中にあって、珍しい外洋の海だ。船はあっという間に港を離れ、広大な太平洋に解き放たれた。風や波から船を守ってくれるものは何もない。冷たい風に吹かれながら2時間の収穫作業を終えると、船はぐるりと向きを変えて港を目指した。雄々しい三陸の海岸線が視界の端から端まで広がっている。目を凝らすと、一部が不自然に真っ白く一文字に塗り潰されていることに気づく。「あそこはどこ行っても防潮堤だらけ。町が壁に囲まれてるみたいだ」と勝太さんは教えてくれた。船は、もと来た港に吸い込まれるように入っていく。「ここは防潮堤もかさ上げもない、昔のまんまの港」と言って彼は岸壁に降り立った。

早朝5時、漁場に向かう「海勝丸」。親子二人が肩を並べる。

津波

港には「地震があったら津波の用心」と刻まれた大きな石碑がある。昭和8年の昭和大津波の被害を伝えるもので、裏には明治29年にも津波が襲来したことが刻まれている。10年前の東日本大震災でなぎ倒されたが、壊れずに残っており据え直された。あの大津波が浜を襲ったとき、勝太さんは25歳だった。都会から帰郷したばかりの、漁師になって2年目の出来事だった。崖崩れが起きるほどの強い揺れで、浜の人たちの頭には「津波」がよぎった。勝太さんは高台に避難して集落の様子を見ていた。はじめに細い川から水があふれ、あれよあれよと言う間に水かさが増していく。バキバキバキという轟音を立て、水は建物の基礎を剥がしていった。目の前の建物が全部浮かんだ。「訳わかんない。完全に思考停止。現実っぽくない風景だった」。津波が去った後は、家も加工場も消えていた。港には船の亡骸が浮かんでいた。

すべてのライフラインが寸断された生活は、仮設住宅に入るまで3ヶ月間続いた。井戸水を飲み、1軒だけ残ったガソリンスタンドの灯油を使って暖を取り、月明かりで夜を過ごした。2週間後にインターネットの電波が復旧すると、勝太さんは情報発信を始めた。北隣は南三陸町、南隣は石巻市の市街地で、いずれも津波の被害が甚大な地域だった。その間に挟まれて報道の目をすり抜けてしまった十三浜には、物資や支援が集まらなかった。勝太さんはブログとSNSを駆使し、避難所の状況や足りないものを呼びかけた。また、ネットに寄せられる声に応え、全国からボランティアの受け入れをした。炭水化物に偏った救援物資で体調を崩す人が多かったので、石巻に寄せられた野菜をトラックの荷台いっぱいに積んで十三浜じゅうの避難所に配った。しばらくすると家が残った